

平成 26 年 10 月 28 日

長岡市教育委員会（定例会）会議録

長岡市教育委員会

1 日 時 平成 26 年 10 月 28 日 (火曜日)

午後 1 時 15 分から午後 2 時 45 分まで

2 場 所 浜海小学校

3 出席委員

委員長 大橋 岑生 委 員 羽賀 友信 委 員 中村 美和
委 員 青柳 由美子 教育長 加藤 孝博

4 職務のため出席した者

教育部長	佐藤 伸吉	子育て支援部長	若月 和浩
教育総務課長	武樋 正隆	教育施設課長	中村 仁
学務課長	田村 均	学校教育課長	竹内 正浩
子ども家庭課長	波多 文子	保育課長	栗林 洋子
中央公民館長	佐藤 実	中央図書館館長補佐	島田 義春
科学博物館長	小熊 博史	学校教育課主幹兼管理指導主事	笠原 徹
学校教育課主幹兼管理指導主事	山之内方史	学校教育課主幹兼管理指導主事	宮 宏之

5 事務のため出席した者

教育総務課長補佐	茂田井裕子	教育総務課庶務係長	水内 智憲
教育総務課庶務係	高杉 雄二	子ども家庭課家庭支援係長	斎藤 裕子

6 議事日程

日程	議案番号	案 件
1		会議録署名委員について
2	第 46 号	臨時代理について（表彰に関することについて）

7 会議の経過

（大橋委員長） これより教育委員会 10 月定例会を開会する。

日程第 1 会議録署名委員について

（大橋委員長） 日程第 1 会議録署名委員の指名を行う。会議録署名委員については、会議規則第 44 条第 2 項の規定により、中村委員及び加藤委員を指名する。

日程第 2 議案第 46 号 臨時代理について（表彰に関することについて）

（大橋委員長） 日程第 2 議案第 46 号 臨時代理について（表彰に関することについて）を議題とする。事務局の説明を求める。

（武樋教育総務課長） 長岡市教育委員会教育長に対する事務の委任等に関する規則第 3 条に、やむを得ない場合については臨時代理という方法で決定できるという規定がある。その場合、次の教育委員会会議で報告し承認を受ける手続きとなるので、この度報告する。長岡市教育委員会表彰被表彰者について、被表彰者は附属長岡小学校 1 年の丸山千穂（ゆきほ）さんである。功績は第 26 回全国ひらがな・かきかたコンクール毛筆の部で最高賞を受賞され、長岡市教育委員会表彰規則第 2 条第 5 号芸術文化の分野における功績に該当するものである。当コンクールは、一般社団法人全国書写書道教育振興会が主催し、文部科学省、東京都教育委員会などが後援している。大会最高賞は「文部科学大臣賞」だが、小学 3 年生以上が受賞対象であるため、丸山さんが受賞した「特別ダイヤモンド賞」は小学 1 年生では最高賞に該当するものである。

（大橋委員長） 質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) ないようなので、これより採決に移る。本件は、原案のとおり承認することに異議ないか。

[「異議なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 異議なしと認める。よって、本件は原案のとおり承認した。

(大橋委員長) 本日の議案の審議は終了する。次に協議報告事項に入る。協議事項として、子ども・子育て支援事業計画(仮称)について、事務局の説明を求める。

(波多子ども家庭課長) 平成27年4月から本格始動する子ども・子育て支援新制度に基づく様々な事業を円滑に実施するため、平成27年度から平成31年度までの5カ年計画を今年度末までに策定するものである。今年度は、7月15日に第1回長岡市子ども・子育て会議を開催し、今後第2回を11月10日、第3回を2月13日に予定している。ワーキングについては、第1回の会議を実施後、4つの部会に分けてより深い議論をし、現場の声を反映させたいと会議委員をはじめ企業や子育て関係者の方82名で8月・9月に計10回開催した。ワーキングで上がった意見を基に事業計画の施策の体系(案)を作成した。これについて担当から説明する。

(斎藤子ども家庭課家庭支援係長) まず、基本理念についてである。現在は「育つよるこび 育てる幸せ 子育てを応援するまち 長岡」が基本理念である。ワーキングを受け、「子育てを応援する」というスタンスから一歩先に進み、「育つよるこび 育てる幸せ みんなで子育てするまち 長岡」を仮の基本理念として考えている。これを11月の第2回会議に諮り、子ども・子育て委員の皆様にはワーキングの形でご意見をいただいたあと、修正したいと考えている。次に基本目標についてである。これもワーキングを基に5つの目標を整理した。1つ目「未来へ命をつなぐ」は、これから親になる世代への応援を目標に、次代の親になるための教育、子どもたちへのいのちの教育を中心とし、次代の親育成をするものである。2つ目「明るい笑顔が一番」は、親と子が共に学び育つことへの応援を目標に、支援事業として実施しているものを中心にまとめ、青少年の健全育成や母子の健康づくりの施策、経済的支援を含め、妊娠から出産までの支援事業をまとめたものである。3つ目「目と心を届けよう」は、

子育てをしているすべての家庭への応援を目標に、障害児への支援事業や虐待防止、ひとり親家庭への自立支援事業、社会的養護を含め、すべての親が子育てしやすい環境づくりと子どもたちが安心できる環境づくりを目指すものである。4つ目「子育ては未来への投資」は、子育てと仕事との調和のとれた生活への応援を目標に、働きながら子育てをするにあたって企業風土の醸成や保育サービス、児童の放課後の預かりサービス等の事業をまとめたものである。5つ目「みんなで子育て」は、市民力・地域力を活かした子育てへの応援を目標に、子育て支援センターである子育ての駅等を中心に、一人ひとりに寄り添う子育て支援や母子保健推進員や児童委員を中心に地域の子育て人材を活かしたネットワークをつくり、地域全体で子育て支援を行うものである。この5つの目標に基づき、各課の事業をまとめていく形を考えている。各ワーキングの詳細については記載のとおりである。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

(大橋委員長) 「子育て応援プラン施策体系」と「子ども・子育て支援事業計画施策体系」では、どのように違うのか。

(斎藤子ども家庭課家庭支援係長) 「子育て応援プラン施策体系」は今年度で終了する子育て応援プラン5年間の事業体系図で、4月からの事業計画についてワーキングで話し合った結果、「子ども・子育て支援事業計画施策の体系」に変更してはどうかと案を出したものである。

(大橋委員長) 子育て応援プランに関わる保護者、学生等への調査に基づき子ども・子育て会議を実施し、そこで話し合いを行った結果を集約したものと考えてよいか。

(斎藤子ども家庭課家庭支援係長) そうである。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(大橋委員長) 具体的な施策に関わるものは今後の子ども・子育て会議を経ながら報告いただけるのか。

(斎藤子ども家庭課家庭支援係長) そうである。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(中村委員) 施策の体系を見比べると内容に大きな変化がないように思われるが、基本目標にキャッチフレーズを付けたことによって分かりやすくなったと思う。2つ目「明るい笑顔が一番」の施策の展開について、「子どもや母親の健康づくり」とある

が、特に母親と特記してあるのは、施策の方向性に「妊娠期からの切れ目ない支援対策の充実」とあるためなのか。健康づくりには母親だけでなく父親も関係していると思うのだが、どのように理解したら良いか。

(波多子ども家庭課長) 父親の健康ももちろん大事ではあるが、妊娠・出産という繋がりから「子どもや母親」と特記したものである。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(大橋委員長) 委員の皆様を拝見すると、それぞれの分野のそうそうたる方々が揃っていることに驚いた。子ども・子育て会議に重きを置いていることが分かった。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(加藤教育長) 子ども・子育て支援新制度が半年後にスタートするが、新制度のための財源は消費税をプラス2%増税した分を子育てと福祉に充て、子育ての方には7000億円充てると聞いている。もし消費税が増税しなかった場合、新制度のスタート時期や内容にはどのような影響があるのか。

(若月子育て支援部長) 今のところ不透明である。もし増税しなかった場合に財源がなくなる不安はあるが、現在は増税を前提に準備を進めているところである。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(若月子育て支援部長) 会議委員のメンバーについて、会議委員へ報酬はないが、色々な方から意見をいただきたいとお声がけしたところ、快く受けていただいた。活発な議論をしていただき、この方々がこれからの長岡の子育てを支えてくれるということが確信できたので、この基本理念に「みんなで子育てする」と掲げた。ワーキングを通じて市民と意識の醸成ができ、子育てが楽しいまちにしていけると感じた。

(青柳委員) 自分の子どもを産み育て、可愛いと思うのは当たり前だと思っていたが、ワーキング部会に参加して必ずしも自分の子どもが可愛いとは思えない人がいる事を初めて知った。行政として、また母親の立場の先輩としてどんな事ができるかといった思いで臨んでいたが、それ以外の問題も生じてきていると感じた。

(若月子育て支援部長) ワーキングに参加した方々は、これまでこのような機会がなく分からない部分があったようだが、「活動しているのは自分たちだけではない」「これはここに聞けば良い」などが分かり、行政を離れ自ら行動するなどワーキングを通

じた参加者同士のネットワークが出来つつあるのはひとつの成果だと思う。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。次に報告事項へ入る。報告事項として、平成 26 年度第 2 回熱中！感動！夢づくり教育推進会議報告について、事務局の説明を求める。

(竹内学校教育課長) 平成 26 年 10 月 1 日に開催し、委員 9 名、事務局 15 名、計 24 名にご出席いただいた。熱中！感動！夢づくり教育次の 10 年の施策の方向性を示し、これについてご意見をいただいた。基本的にはこれまでの理念を継承し、次の 10 年とさらに伸ばしたい力、資質、能力を育てていくという方針を説明し、ご意見をいただいた。理念の継承として「夢(志)を描く力」「生き抜く自信」を育むとし、次の 10 年では「社会性やコミュニケーション能力」「郷土長岡への愛着や誇りを土台に社会に貢献できる資質・能力」を育みたいと考え、その実現に向けた施策として 4 つの方向性で事業立てをしていきたいと説明した。主な意見では、夢づくり教育の理念の継承として「夢(志)を描く力」「生き抜く自信」を育むとあるが、夢と志は意味が違うので括弧書きにせず、「夢を描き志を立てる力」と分けたほうが良いのではないかとご意見をいただいた。これについては、「夢を描き志を立てる力」「生き抜く自信」を育む」としたいと回答した。次に、子どもたちに本物体験をさせようとしているが、現在の夢づくり教育の事業には幼児対象が少ないので、保育園・幼稚園を対象とした事業を増やすようお願いしたいとご意見をいただいた。これについては、これまでも取り組んできたが、小・中学校、幼稚園・保育園の区分を明確にし、幼稚園・保育園を対象とした教育を下支えする事業を取り入れることを検討したいと回答した。次に、地域によって、コミセンやコミセンに関わっている団体が学校に求めている活動が違う。校長からコミセンの活動を知ってもらい、学校と地域の連携を深める政策を考えてほしいとご意見をいただいた。これについては、校長にコミセンや地域との連携を深めるよう指導しており、校長によってはしっかり連携をとっているところもある。校長にはさらにコミセンと連携を深めるよう指導し、地域からも学校に気軽に情報提供、相談をしていただきたいと回答した。次に、今後 10 年、人口減の問題があり、郷土を愛する

子どもを育む郷土教育をもっと前面に出し、日本の歴史を学び、それを土台に世界で活躍することを大事にしてほしいとご意見をいただいた。これについては、郷土長岡への愛着と誇りを土台に社会に貢献できる資質・能力を育むために有効な事業を練り上げていくと回答した。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

(大橋委員長) 施策の方向性は、すでに練られたものなのか、それともこれから検討された上で示されるのか。

(竹内学校教育課長) 学校教育課だけでなく市の全部局で事業化し、全体を見た上でこれまで3つだった柱を、4つの柱に再分類すべきかなどを検討していく。予算要求・内示後に体系図を作成し、推進会議に諮った後、定例会でご報告させていただく予定である。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

(大橋委員長) 10年を振り返った時に素晴らしい成果を収めているので、次の10年にも期待している。「校長・教師のやる気を応援」とあるが、学校あるいは教職員の受け止め方に温度差を感じる。教師の意欲と活力を引き出すために、技能、専門性豊かな教員が、「ようこそまちの先生」のように指導にあたる人脈の大事な柱になると思う。教師力を引き出すと同時に格差についてご意見・指導があれば伺いたい。

(羽賀委員) 校長先生の裁量権によって、学校の雰囲気が変わってしまうので、そこに支援していく役割があるのだと思う。今までの10年が事業を紹介する時期であれば、これからの10年は重点的に絞り込んで課題に取り組む時期だと考えている。

(竹内学校教育課長) 教職員の意欲、校長先生の熱意を引き出すことは重要なことだと考えている。「福井県の学力や体力が常に上位にある秘密」をテーマにした福井教育フォーラムに参加してきた。教職員集団の熱意や人間的資質の高さが、児童生徒の教育には大切で、人を育てる資質向上が必要であると学んできた。事業を進めると同時に校長、教職員の熱意や意欲を引き出す方を政策的なPRとともに浸透させていく必要があると考えているので、今後検討していきたい。

(大橋委員長) 他に質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。次に、「家庭でワクワクお手伝いポスターコンクール」審査結果について、事務局の説明を求める。

(波多子ども家庭課長) 昨年度から「家庭で子どもに手伝いをさせよう運動」をPRするために始めた事業である。昨年は応募対象学年を小学4～6年生に絞ったため37点の応募であったが、今年度は小学1年生～中学3年生までに広げたところ143点に応募作品が増えた。数とともに作品の質も向上したように思える。受賞した学校、氏名は記載のとおりである。大賞を受賞した日越小学校3年吉田光汰さんの作品と本人のコメントが市政だより11月号に掲載される予定である。本人や学校の先生も喜んでおり、「お母さんが喜んでくれるのが嬉しくてやっている。今後もっとお手伝いしたい。自分が家族の中で役立っている事が嬉しい。」とコメントしている。当初、大賞と優秀賞3点を予定していたが、どれも甲乙つけがたかったので審査員特別賞を新たに設け、越路中学校2年本多黎楠(れいなん)さんがこれを受賞した。学校賞についても当初予定していなかったが、東谷小学校が一生懸命に取り組み27点応募いただいたので、受賞の運びとなった。審査については10月10日に、デザイナーズネットワーク長岡副会長である今井毅さんを審査委員長とし若月子育て支援部長を含む5名で行った。表彰については、お手伝い推進週間を11月9日から22日までと定め、国では家族週間であるが長岡市では家庭の手伝いをさせよう週間とし、この間に学校で表彰してもらいたいとお願いした。また、表彰者として教育委員の皆様をお願いした。作品の展示会も予定しており、11月8日から16日にはさいわいプラザ1階市民ホールにて、11月18日から21日にはアオーレ長岡西棟ホワイエにて開催予定である。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。次に催し物の案内に入る。

(小熊科学博物館長) まず、さいわいプラザで開催中の「第63回県下生物・岩石標本展示会」と「第56回県下自然科学写真展示会」についてである。審査後、10月20日から11月2日まで中央公民館大ホールにて展示している。自然の観察や研究を通して科学的に考える力を養い、自然保護思想が普及・向上することを目的と

して、科学博物館で新潟県内の子どもたちを対象に毎年開催しているものである。県下生物・岩石標本展示会は科学博物館開館当初から開催している伝統的なものである。出品点数は昨年度 89 点であったが今年度は 72 点と 17 点減少しており、参加学校数も昨年度 50 校から今年度は 38 校と例年より減少している。特に昆虫標本が減少しており、夏の暑さで虫が捕りにくかったことが影響しているようである。学芸員の発案で、長岡市在住の松岡達英絵本原画展「海へのいきもの」を同時開催している。一般の方にも足を運ぶ機会になればと今年度から取り組んだものである。次に、郷土史料館で毎年開催されている特別展について紹介する。今回は、「長岡商人品田家史料の世界」を 10 月 11 日から 12 月 21 日まで開催している。江戸時代の長岡商人品田五郎左衛門家の資料が数年前に科学博物館へ寄贈され、それに基づいて当時の長岡商人の姿をご覧いただけるよう展示したものである。機会があればぜひご覧いただきたい。

(竹内学校教育課長) 中学生総合文化祭「H S ながおか夢フェスタ」についてである。11 月 22 日アオーレ長岡で開催予定である。参加校数は、昨年より 1 校増え計 11 校の参加となる。山本中学校による総合的な学習の時間の発表や堤岡中学校が自主作成したミュージカルの発表にチャレンジするなど、各校様々な題材で参加要望があった。オープニングでは合併 10 周年を迎えるシンボルの歌として、長岡人のイメージソング「故郷(ふるさと)はひとつ」をここで披露してもらおうと考えている。また、エンディングでは長岡市歌である「笑顔いきいき」を保育園児 20 名に手話付きで歌ってもらう。是非お時間があればご覧いただきたい。

(大橋委員長) 質疑、意見はないか。

[「なし」と呼ぶ者あり]

(大橋委員長) 質疑、意見なしと認める。他に報告事項はあるか。これをもって協議報告事項を終了する。

(大橋委員長) 本日は、定例会の前に渋海小学校、下小国小学校を訪問した。各校の取り組みや課題について、委員の皆さんと意見交換したい。

(青柳委員) 下小国小学校を訪問した。児童数が 54 名に対して、地域のボランティア

ィア数が 350 名と非常に多いことに驚いた。地域の育成会の方が、「大きな問題がない地域である」と話していた。問題がない要因を探ったところ、1つの保育園にはじまり、3つの小学校に分かれ、また1つの中学校になる地域であること、また、3校の小学5～6年生で行う3泊4日の通学合宿では、宿泊施設からまちのバスで学校へ通い、お風呂はもらい湯とって地域の方にお風呂を提供してもらうなど、地域の方との交流が深まっていることも要因の一つであるようだ。その3校でインターネットのスカイプを用いて3校同時に授業を行っており、今年度は直接会っての交流も深めていると聞いた。中学校が行っている社会貢献活動に小学6年生も参加しているせいか縦のつながりがあり、いじめがなく、良好な人間関係が維持できていると先生方も評価している。反面、自発的な発言や積極性に欠けるといった提示もあったが、実際はコミュニケーション能力が高く、少人数の良さを児童が感じながら生活しており、先生方はその一歩先へ目標設定し、児童たちを導いているように感じた。

(中村委員) 渋海小学校では、コミュニケーション能力を高めるために、積極的な学校生活を過ごすことができる子の育成がテーマのようであったが、少人数での学力向上対策をどのように進めていくかについて、校長先生からお話があった。複式学級はなく1学年1クラス制で、渋海太鼓という継承活動を行っておりコミュニケーション能力や集団性、協調性などがよく育っていると聞いた。学校に掲示されている絵や習字、小国和紙についての新聞を見ると、絵は色彩豊かで、新聞は文章力があり内容が分かりやすく書かれていた。子どもたちの能力が感じられた。文章力はあっても発表力に課題があるので授業に発表の時間を設けるなど、積極性の向上に取り組んでいるとおっしゃっていた。

(大橋委員長) 下小国小学校では地域の方は、「子どもは宝だ」とおっしゃっていた。盆踊りのときによさこいをやり、参加する子どもは6～7人しかいなのだが、お年より世代が大変喜ぶのだそうだ。祭りの笛や太鼓は全て子どもたちにやらせるといった育て方をしており、地域の方と交流する場を設けているので、コミュニケーション能力が低いとは一概に言えないのではないかと思った。地域性のメリットを生かして活動しているが、コミュニケーション能力に課題があるため、いざという時に話ができないと先生方はおっしゃっていた。

(羽賀委員) 校長先生にお伺いしたところ、一番の課題は、言わなくてもだいたい分かるだろうと具体的な表現をしなくて済むことだとおっしゃっていた。これが言語にしてしっかり伝える、論理性の欠如に繋がっていることは先生方も理解していた。小規模校の良さを伝えるだけではなく課題を提示し、各々の教員が今年目標を絞り込む中で、具体的かつ論理的に考え表現力を高めていくことに授業の中で取り組んでいた。5年生では朝、ミニスピーチをして話し合いをし、論理的な指導に繋げていた。4年生までの教室にはものの考え方などがわかりやすく掲示しており、5・6年生ではそれを実践していく。人に伝えるという面で、浜海太鼓のような伝統的なものに取り組んでいるが、自信を持って表現できないようである。話さなくても分かってしまうことが根本課題なのではないかと感じた。そこに留意して全ての授業の展開を見立てているとお聞かせいただいた。

(大橋委員長) 地域性を大事にし、地域のお年寄りや名士を生かし、書家、俳句の名人などを招いて授業を行っている。恵まれた人材環境を生かす点については存分に発揮されている。「何か足りない」と言っていたが、何かとは何なのだろうか。

(青柳委員) 日常生活では友達と会話ができるし、コミュニケーションもとれるが、なにか表立った場面に一人で立たされたときに、力が発揮できないということなのではないか。

(大橋委員長) 教師の力は大きいと思う。下小国小学校の3・4年生では地域のずい道について単元開発し、授業で取り組んでいる先生がおりすごいと思った。これまで地域の社会科の題材には、ほとんど浜海川が使われていた。幅30cmのずい道を300m作り、田んぼに水をひく事業に取り組んだ集落があり、それを古老に聞いて単元化して授業に取り組んでいた。現地で見ることができる生きた教材を用いた素晴らしい授業で、子どもたちも食いついていた。

(羽賀委員) 学力だけではなくて、考える力に重点をおいて取り組んでいた。具体的な授業と同時に、大きな課題として考える力を身につけさせるためミニスピーチや話し合いを行い、論理的思考につまずいている子どもへは特に支援していくと話されていた。

(大橋委員長) 小規模校であればあるほど、話さなくても分かるではいけない。じっくり話を聞いてやり、時には自分の思いを語ることも大事なのではないか。まと

まりはすごく良かった。全校でやるよさこいや浜海太鼓、その他の祭りでの地域の
人との関わりは良いが、いざという時に自分ひとりでも考え発表できる力を身につ
けさせなければならない。また、スカイプを用いた授業を年2～3回行ってあるが、
これを今後どうするのか。

(羽賀委員) 上小国小学校ではオーストラリアの学校とスカイプを用いて互いの言
語を学ぶやり取りしていた。緊張して泣きそうになっている子どももいたが、気持
ちが通じた瞬間にがらりと変わって積極的に質問をしていた。資質はあるので環境
を整備し、きっかけを与えてやれば、違う視点を取り込み、違う視点だから説明を
しないと分からないと直感的に学べるのではと思った。

(大橋委員長) この3校が直接交流して学習できる環境下にあるのはとてもよいこ
とである。子どもたちにもよい刺激となるし、先生同士の情報交換もできる。論理
的思考で話すなど、先生方が積極的に絡むことが大事である。ただ漠然と年3回実
施するのではなく、何をそこで取り上げるかを大事にしながら3校で取り組めばよ
い方向性が見出せると思う。

(羽賀委員) 小国地域について知らない人たちとやり取りする時には、論理的に話
さなければ通じないので、説明の論理性を高めることができる。

(中村委員) 小国地域は和紙が有名で、卒業証書を自分たちで漉いている。他地域
の子どもたちにはできない、自慢できる体験をしている。

(羽賀委員) 近い将来、和紙が世界遺産登録されるかもしれない。もしそうなれば
子どもたちにとっては世界的な遺産が地元にあるので、色々な教材に活用できそう
である。オーストラリアの学校から話がきたのも、小国和紙に魅力を感じたため
である。小規模校であるメリットとデメリットが明確になった。それに対して教員や
地域の方が一生懸命取り組んでいるが、それだけでは解決しない課題もある。

(加藤教育長) 子どもたちにとって望ましい教育環境を整備し、同時にそこで働く
教員の職場環境の向上も図らなければならない。この環境がベストなのか、なぜ小
学校を3つに分けたのか、それを存続しなければならない状況なのか、将来どうす
れば良いのか。地域委員の方が召集をかけ、来月の半ばに3小学校の保護者の役員
会で、今後の学校規模のあり方を勉強するそうだ。地域委員会の議題に小学校のあ
り方を取り上げて下さっており、長岡市でも大変珍しい。学校規模の話題を地域全

体で考えてくれている。中越地震、中越沖地震から 10 年経つが、子どもは増えていない。長岡市では、規模適正化については地域の方の自主性を尊重することを基本としている。規模のせいで学力が向上しない、適正規模が必要であるといった声は教育現場からは上がらない。保護者にはアンケートを行ったので、次のステップを考えなければならない。給食の際に子どもと話をしてみると、同市内に大規模な学校があることを知らない子もいたので、小学校同士の交流があると良いと思った。どの地域でも子どもたちに恵まれた望ましい教育環境を整備することが大きな課題である。

(大橋委員長) これをもって本日の定例会を終了する。

会議の次第を記載し、その相違ないことを証するために署名する。

長岡市教育委員会委員長

長岡市教育委員会委員

長岡市教育委員会委員